

四 隈川と隈町

日隈山（亀山公園）（図1・34）

日田市周辺における「放学・山遊」といえば、やはり二隈川の河畔と亀山（亀山公園）をあげなければならない。すなわち、

・天保十二年（一八四二）

四月十一日。伊織、範治、祐之ト散歩シテ隈川ノ橋ヲ渡り、杉林ノ下ニ息フ。遂ニ亀翁山ニ登ル。余少年ノ時ハ数々此山ニ遊ヒシカ。今ハ三十年ニシテ一来セリ。故ニ之ヲ記ス。帰家同遊ノ諸子ト飲酌シテ、合セテ慎治ヲ招ケリ。

とあるように、今日でも水郷日田の象徴ともいえる亀山公園周辺は、淡窓が幼少から親しんだ景勝地であつた。淡窓が、この公園周辺の風景を詠んだ「隈川雜詠」五首（「遠思樓詩鈔」巻上）があるのは周知のとおりである。

十里清江藍不如。
児童未解操舟楫。
也僕欄干学釣魚。

少女乘春倚画欄。
遊人停棹聽清唱。
不省輕舟流下灘。

江上數峰如画屏。
豪奴非惜千金価。
難買亀山半面青。

亀山宛在水中央。
書戟彩旌空一夢。
伝是毛侯古戰場。

觀音閣上晚雲帰。
忽有鐘声出翠微。
沙際争舟人未渡。
双双白鷺映江飛。

このうち第五首の「觀音閣上・」の詩は、前記の慈眼山觀音閣をあ

てる見解もあるが、一首の内容からして亀山の対岸の高瀬地区にある越原觀音か穴平觀音あたりが考えられよう。このうち穴平觀音では、文化十四年（一八一七）十月に淡窓が詩会を開き詩を寄せているところである。同觀音は「鏡坂」（後述）に近い上野地区あたりにあるという。

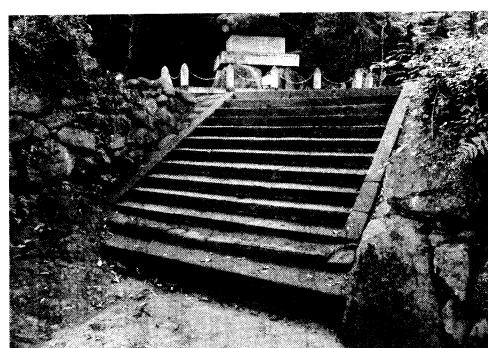
また第二首には「不省輕舟流下灘」と

あるが、亀山公園の麓には、日田の人が丸三瀬（丸三は森家の屋号）と呼ぶ早瀬が今もある。当時は今よりさらに急流だったはずである。第一首の「人家往往架流居」という情景も、近世末期にはさもあろうと思われる光景である。いずれにせよ清流三隈川と亀山の森という光景は、まさに「豪奴非惜千金価。難買亀山半面青。」の詩にふさわしい絶景であったのである。

日隈城跡（図1・34）

淡窓がこよなく愛した亀山、つまり現在の亀山公園はいうまでもなく戦国末期の日隈城の跡である。

文禄二年（一五九三）、大友氏が改易された後、日田地域は太閤蔵入地となり、代官宮木長次郎が派遣された。宮木氏は日隈山に日隈城を築き、城下に隈町を配した。日隈山は亀翁山とも称し、もともと亀翁山真光寺が寺地を構え、春日神社が鎮座していたが、築城に伴い真光寺は竹田村へ移され、春日神社も田島村若宮八幡社へ遷座



亀山公園と日隈城跡